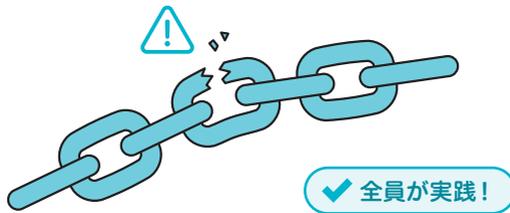


情報扱うすべての人が「自分ごと」としてとらえる

情報セキュリティは、一部の専門家やシステム管理者だけが意識すればいいわけではありません。セキュリティの強さは、一番弱いところで決まります。もしチームや組織の中で一人でも知識や対策が不十分な人がいると、その弱点を狙われる可能性が高くなります。そして、その1つの弱点が突破されると、連鎖的に周囲の人や組織全体に被害が及ぶこともあります。

鎖は一番弱い輪以上に強くなれない

一番弱い部分で強度は決まる。



「鎖は一番弱い輪以上に強くなれない」というのはセキュリティ業界では有名な名言。1つでも輪がちぎれてしまえば鎖の役目は果たせないよね。セキュリティもそれと同じ。全員が実践して、情報を守っていく必要があるんだ。

たとえば、同じ端末に複数の人の情報を保管していた場合、その端末が攻撃されれば、自分の情報だけでなく他の人のデータもいっしょに盗まれる危険性があります。また、1つの端末が攻撃されると、その端末を踏み台にして、その人だけでなく、知り合いや職場にも攻撃が広がるケースもあります。だからこそ、情報を扱うすべての人が情報セキュリティを「自分ごと」としてとらえ、知識を持つことが非常に重要です。

セキュリティ事故を起こしてしまうと、
被害者でありながら**加害者**になるリスクがある



「継続的に」学んで定着させる

情報セキュリティは一度学べば終わりというものではありません。日々新しい脅威が生まれるデジタル社会において、全員が定期的に復習し、スキルや知識を常に最新の状態に保つことが求められます。そうすることで、常に変化するリスクにも対応できるようになります。

情報セキュリティを学ぶ際は、自分が知識を身につけるだけでなく、それを周囲と共有することも心がけましょう。そうすることで組織全体のセキュリティを強化できます。たとえば、車の運転を考えてみてください。全員がルールを守って安全に運転しなければ、事故が起こるリスクが高まります。情報セキュリティも同じで、全員が情報を安全に扱わなければセキュリティ事故が起きるリスクが高まります。全員が知識やスキルを共有し、継続的に学び続けることが重要です。

「知らない」から「共有する」へ

